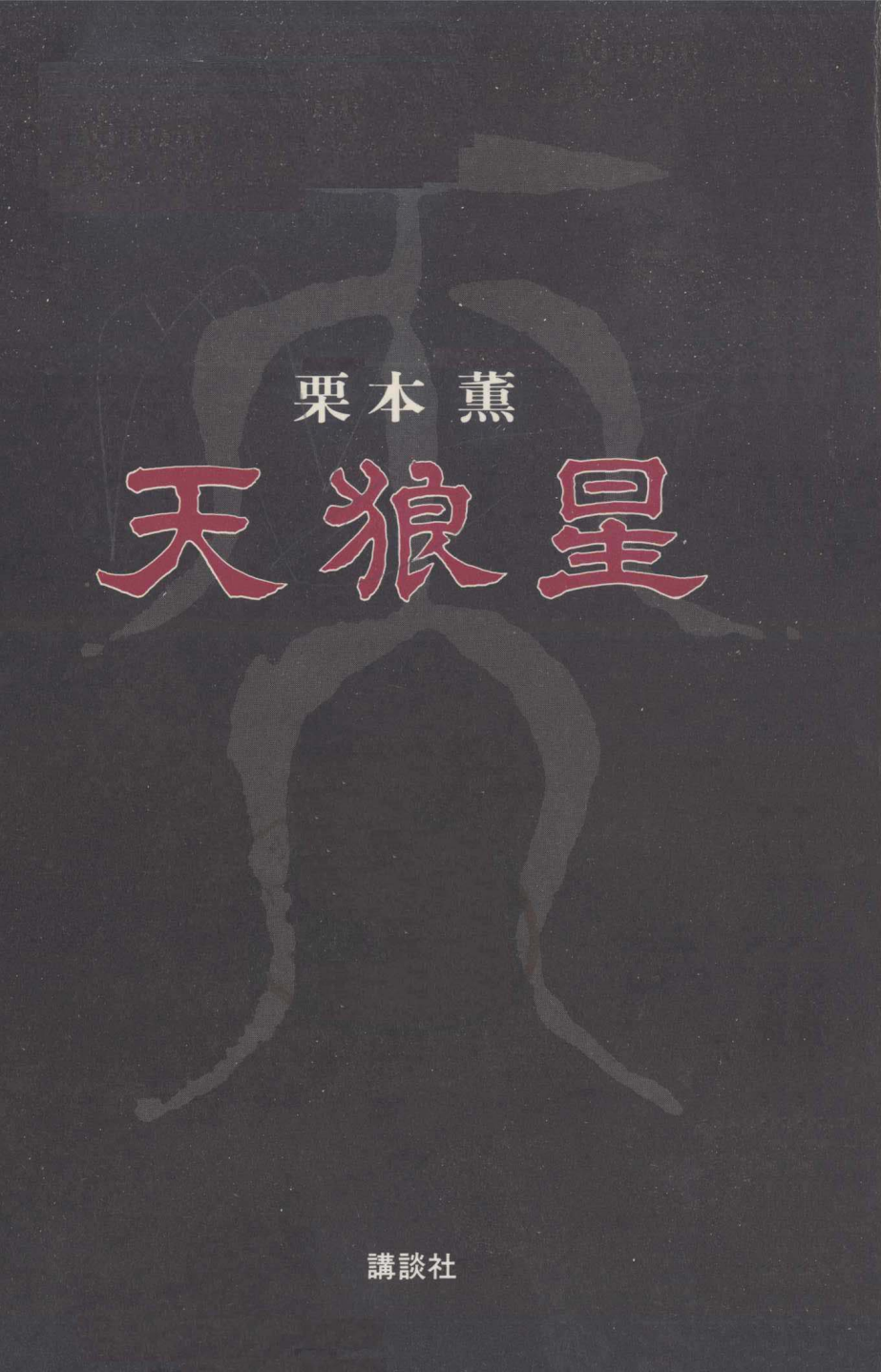


栗本 薫

天狼星





栗本 薫

天狼星

講談社

天狼星

昭和六十一年六月三十日 第一刷発行

著 者——栗本 薫

発行者——野間惟道

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—二二—二一

郵便番号——一一二

電 話——東京(〇三)九四五—一一一(大代表)

印刷所——株式会社廣濟堂

製本所——藤沢製本株式会社

定 価——一〇〇〇円



落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えます。

© Kaoru Kurimoto 1986 Printed in Japan

天狼星——目次

プロローグ——夜の都会 7

第一章 山羊座 10

第二章 水瓶座 34

第三章 魚座 61

第四章 牡羊座 89

第五章 牡牛座 115

第六章 双子座 142

第七章 蟹座^{かに} 168

第八章 獅子座^{しし} 194

第九章 乙女座 219

第十章 天秤座^{てんびん} 244

第十一章 蠍座^{さそり} 270

第十二章 射手座^{いて} 296

イラストレーション／天野喜孝
ブックデザイン／安彦勝博

天狼星

プロローグ——夜の都会

「僕は夜の都会が好きだ」

低い、やさしい——それでいて、どこか嘲けるようなひびきをひそめたささやきが、静かになった室の中につづいていた。

「ここからは、夜の街がよく見える。ここから見る東京は、昼間とはまったく別の街になる。——昼はあんなに煩雑で、埃りっぽくて、けたたましくて、情緒もなにもないところで——じっさい、世界でいちばん美しさに欠けた都市といわれても、しかたないかもしれないがね。しかし、夜は、すべてをかえる。……」

さっきまで、室の中には、ひくいうめき声、狂おしいひそやかなくすくす笑い、ぎいぎいと何かのきしむ音——そして、人と人の争うような、あやしげな物音が満ちていたのだった。

だが、いまはもう、室はしいんと静まりかえっている。灯は消され、レースのカーテンをひいた窓のむこうに、きららかにふりまいた宝石のような灯とネオンがまたたいている。

「ビクトリアピークからみる香港の夜景より、摩天楼の町ニューヨークの夜景より、僕は東京の夜が好きだ。香港やニューヨークのように、美しくはないかもしれないが、そのかわりあやしくて、人をそそのかす。きらびやかで、よるべなくて、はかなげで——そう、まるで、おまえのように……」

かすかに鼻をつく、エキゾチックな香のにおい。窓ぎわに立って、外をみているのは、背のたかいすらりとした男のシルエツトである。

「僕は、美しいものが好きだ」

向うをむいたまま、男は、いらえない背後にむかつて云いつづけた。

「僕の宝石。——東京は、ひるまの味気ない見かけの下に、こんなにたくさんさんの宝石をかくしている。——地上の星が、天の星の光をかき消してしまふ、それも好きだ。地上の光にまぎれると、はじめて、ゆっくりと息がつける——たといいつきでも、僕でさえ、そんなに孤独じゃない、という錯覚に酔える。——おろかしく、見苦しい人間どもにさえ、何とか我慢のできる心地になる」

室内は、しんとしずまりかえていた。かすかにエア・コンのうごく音だけがきこえている。

「いっそ、夜が明けなければいいものを——いつまでもこのやさしい闇が、世界をおおいつくしておればよいものを。僕の美しい、まがいの宝石が、いつまでもあやしく美しく輝いてみえるように」

どこかで——

かすかなカタンという音がした。

うす闇の中で、夜光時計が光る。——午前二時。

はるか下の通りを走る車のエンジンやクラクションも、この室の中へはきこえない。

同じように、この室の中の物音は、外へは決してきこえぬだろう。

そこは、外界から切りはなされた別世界——夜のなかの異次元かとみえた。

「——ごらん、ハニー」

つと、しなやかな手が、カーテンをひいた。

「美しいと思わないか、この夜景を。これが、あと、数時間で失われ、また夜がくるまで見ることができないなんて——なんて残念なことだろう。この数知れぬ灯のもつて、一体、何がおこっているのか、どんな突拍子もない、どんな想像を絶することがひそやかに行われているか、誰も知らないのだよ——そうだね、君も、そう思うだろう、ハニー」

いらえない。かわりに、ネオンの光が、室の中をほのかにたらし出し、ひろいガラス窓の彼方を、夜間飛行の飛行機の赤い灯が、音もなくよこぎってゆくのがみえる。

「カイロ——パリ——マドリッド——ニューヨーク——北京」

ゆっくりと声がつづいた。

「夜をこえて、飛んでゆくんだよ、あれは。ごらん、ハニー——ああ」

かすかに、声にひそんでいた、あざけりのひびきがつよまった。

「そうだった。——この、折角の美しい夜景も、何もかも——もう、君には、見えないのだったね」

ゆっくりと、彼は、ふりむいて、テーブルの方へ歩みよっていった。夜を徘徊する、魔性の巨大な肉食獣をおもわせる、しなやかで音もないしぐさ。

「なんと、残念なことだろう。この、美しい目が、もう二度と僕を見ることもできぬなんて。この可愛い唇が、何ひとつ、僕にこたえることもないとは。——ねえ、ハニー。愛しているよ……わかっていただろう？」

やはり、いらえはなかった。

ぐるぐるとまわる、窓の外のビルのサーチライトが、室を照らし出した。

その光が一瞬、テーブルの上にあったものを、はつきりとかびあがらせる。

それは——

恨みをのんだ目を見開き、かすかにひらいた唇から、ほそい血の筋をしたたらせた、若い女の生首だった。

第一章 山羊座^{やぎ}

——十二月二十一日～一月二十日

第一デーク

「あら——」

遅れて入ってきた田宮^{れい}怜が、席をさがして進んでいったとき、すでにパーティの座はかなり盛りあがっていた。

どっと笑い声と、どよめきがおこる。

「何の話？　ねえ？」

「あ、怜がきた」

「おそかったね」

「いまハレー^{すいせい}彗星の話してたの」

「ママがね、おもしろいこと云ったのよ」

怜をみると、客たちはどよめいて、ひざおくり^{ひざおくり}に場所をあけた。

容姿の美しさのゆえにこそ、こうしてファッション・モデルにえらばれた、美しく背のたかい若い男たち、女たちがあつまっているここさえ、田宮^{れい}怜のまわりだけが、ひとときわ輝いている感じがあらる。

といって、田宮^{れい}怜が、そこにモデルクラブ^{ケイ}《K》の十周年を祝うためにあつまったファッション・

モデル、デザイナー、スタイリスト、カメラマン、編集者——それらの選ばれた、先鋭的な人びとの中で、いちばん美しい女だということでは、それは、なかった。

むしろ、整った造作（ぞうさく）という点では、モデルたちのなかでは異色の方かもしれない。彼女はおそろしく背がたかく、一七五cmはあった。日本人ばなれした脚の長さ、胴の細さは、黒人のプロポーションに近い。髪は少し脱色してベリーショートに切り、仕事のとき以外、一切化粧をしない。

その長身をツイードの背広と、仕立のいいシルクシャツにつつま、ニット・タイをして大きなストールをまきつけ、片耳にダイヤのピアスをくるめかせ、手首のブレス以外、何もアクセサリーはつけていない。

口が大きく、目はつりあがっていて、鼻はギリシャ人のようだった。頬がそげて、きつい顔立ちなので、美しいというよりはむしろエキゾチックのほうだ。しかし、恐しく目立つ存在で、また見るものに、これまでみたこともないくらい美しい女だ、と思わせる強烈な個性があった。たいていの、ふつうの美貌のモデルたちは、田宮怜のまえでは、ほかのように没個性にみえ、それが、彼女が日本よりむしろ外国で人気のスーパー・トップモデルとして成功している理由だった。

それにしても、夜ごとにさまざまなパーティーの行われているこの『パーティー・プレイス』であつても、こんなに華かで、美男美女ばかりのパーティーは、年一遍もないだろう。

ファッション・モデルたちが、みなずらりとして美しいのは、職業柄当然としても、カメラマンやスタイリストたちも、それぞれにあかぬけて、いかにも普通人とはちがう存在だ、という矜持（きょうじ）と気取を、一杯にただよわせていた。皆があかぬけた流行の服装や、突拍子（とつぱし）もない派手ななり、目立つメイクとヘアをし、華かにきそいあつていた。

が、はじめの、とつぜん光の渦（うず）にとびこんだようなめまいがしだいに馴（な）れてくると、この美しい、有名な、ふつうでない人々ばかりの神々のあつまりのような座にも、ちゃんと、中でひとときわぬきん出た存在や、きわだって目をひく存在、そのまわりにおのずと人のあつまる存在が星々の中の恒星（こうせい）の

ようにいることが、目に入ってくる。

田宮怜もそうした存在の一人だった。

「何よ、何をいったの、ママが」

「リタがいつてよ」

「あのね——もし、ハレー彗星が生まれた星座の人がいたら——」

云いおわるまえにくすぐすと、浅黒い肌、大きな目、化粧品のカンペーンで売れっ子のモデルのリタが笑い出す。

「なんだ、つまらない」

田宮怜は、切れあがった目に、独特な冷やかな笑みをただよわせた。

「はい、怜」

「あら、かやの、久しぶりね」

「何飲んでるの怜——なによ、ジンフィズなの？」

「私車だもの。パールは？」

「それが、まだなの」

かやのの目が、いじわるい猫のようにくるめいた。

「残念ね」

「どういう意味？」

「いーえ、別に」

「ねえ、怜、怜って、何座だっけ。てんびん座？」

つややかなストレート・ヘアのダイヤモンドがわりこんだ。少し、日本語のおぼつかない、ハワイの三世だ。

「また、星座の話？——云ったでしょ、何回も。乙女座のABよ、私」

「乙女座！ 怜が、乙女座！」

「あんまり意外で、何度きいても忘れるんですってさ、ダイは」

「何よそれ」

「ええと、怜が乙女でと——かやのは蟹座^{かに}のB型——ママがうお座で……」

「何よ、ダイ、占い師でも、はじめたの」

「すごい、すばらしい、新しい星占いの先生、見つけたのよ」

ダイアンが昂奮していった。もとより、好きな連中ばかりのこととて、たちまちわつとあつまってくる。

「そりゃもう、すっごくあたるんだから！」

「キヤーツ、ダイ、紹介してえ」

「ね、ね、何の話、何の話？」

「あのね、ダイがね——」

「ほんと、好きね、みんな」

田宮怜は云うと、するりと立ちあがった。

「ママ、おめでどう」

「あら、怜。忙しいのに、わるかったね」

「とんでもない、ママのことじゃないの」

《K》のオーナーは、ケイ・中原——自分ももとはトップモデルの、肥^とりはしたがまだ十分美しい黒づくめの女だ。

田宮怜は、そのほほにそつとキスして、用意の小さなコサージュを手わたすと、うずまく煙草^{たばこ}の煙とけだるいジャズのBGM、それをかきけすような星占いの話のあいだをぬって、いちばん奥のカウンターの方へ、歩いていった。

「お早うございます、先生」

「あ、怜」

「怜よ」

「怜、いつもすてきね」

「きれいわ、とっても」

「ありがと」

大理石のカウンターをとりまいてゐる女の子たちに、艶然とほほえんでみせ、彼女たちのまんなかに、カウンターによりかかって立っている一人の男に、つと近よった。

これもまた、この銀河系のなかの、ひとときわ大きい恒星のひとり——トップクラスのデザイナー、飛鳥京介、『エスピオナージ』のオーナーでもある。しかし、トーキョー・コレクションの人気デザイナーである、というだけでなく、きわめて粹な、美貌の、プレイボーイとしても、有名な存在だ。

さしも長身の田宮怜でも、一八〇cmを楽にこえる飛鳥京介のまえでは、小がらにさえみえる。週末は必ずヨットで海に出るか、自宅のジムで鍛えているというからだつきは、ムチのように細くしなやかだ。薄色のポルシェのサングラスをかけ、白皙のおもては映画俳優よりよほど美しい。

今夜は、綾織りのオリーブ色のタキシードにエメラルド色のサテンのシャツを着て、片手にシャンパン・グラスをもち、肘をついてカウンターにもたれたところが、そのまま一幅の絵になっていた。シルクの純白のマフラーが肩からだらりとかかっているのさえ、ことごとくスタイリストが細かく効果を計算してかけたようにみえる。

「やあ、サッフオー」

彼はとびきり気障な微笑をうかべて云った。

「遅れてご登場？ 崇拜者の群は、どこにおいて来たの？」

「よして、先生——私、そんな気分じゃないの」